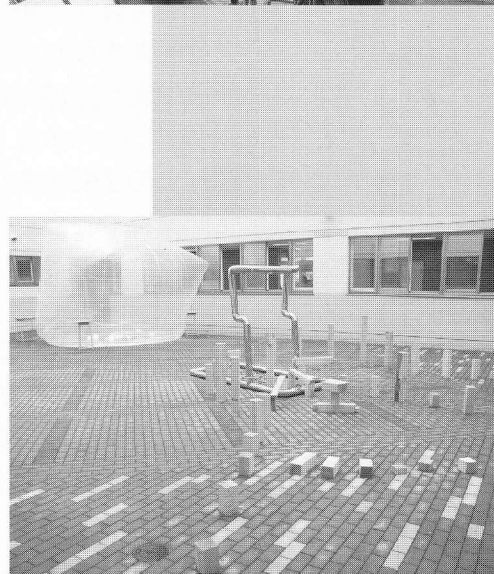
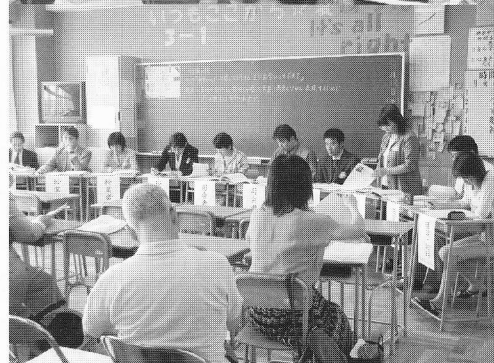




●第54回全道造形教育研究大会旭川大会特集●



もくじ

- 大会風景<表紙>..... 1
- 第54回全道造形教育研究大会
旭川大会運営委員長挨拶..... 2
- 旭川大会を終えて(大会研究部長) ... 3
- 熱き旭川大会を終えて..... 4~5
- 大会参加の声..... 6
- 第55回全道造形教育研究大会
函館大会のご案内..... 7
- 地区サークルだより..... 7~8



**北海道
造形教育
連盟**

No.119 2004.12.7発行
発行 北海道造形教育連盟

委員長 富田 泰

事務局 札幌市立澄川西小学校 今 裕子
〒005-0002

札幌市南区澄川2条5丁目
TEL811-7785・FAX811-0326



上川大会を終えて

第54回全道造形教育研究大会旭川大会

運営委員長 及川 輝夫

(旭川市立永山南中学校)

例年にない猛暑の上川の大地、旭川市において「豊かに感じ 思いをふくらませ あらわす喜びを」をテーマに、第54回全道造形教育研究大会旭川大会を開催することができました。お陰様で全道各地から400名を超える皆様に参加いただき、有意義な研究大会にすることができました。また、北海道教育庁上川教育局指導主幹の横濱拓哉様、旭川市教育委員会教育長の鳥本弘昭様をはじめ多くのご来賓と、北海道造形教育連盟委員長の富田泰様、連盟顧問の先生方のご臨席を賜り、盛大に開催できましたことに心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

振り返りますと、昨夏の空知大会レセプションで道造形連盟旗を引き継いでから、本格的な準備が始まりました。旭川では過去5回の全道大会が開催されていますが、11年振りということで、前回の大会運営にかかわった先生方も少なく、手探りの状態で大会準備を進めてきました。幼稚園・高校、更には上川造形教育研究会の全面的な協力を得て、12の公開授業と6つの分科会を開催する運びとなりました。

今大会では「生の造形教育」を研究主題として、「生な出会い」を大切に、「生な体験」「生な思考」などプロセスを重視した研究を進めて参りました。公開授業と分科会では、小学校表現Ⅰ・Ⅱ、中学校表現・鑑賞の各領域別部長を中心に研究の推進、プレ授業等実践の成果を紹介することができたものと思います。反省会におきましても、児童・生徒の変容ぶりや興味の持続などの報告がありました。また、幼稚園、高校分科会におきましても活発な話し合いがなされ、実践の交流ができたものと思います。

西野範夫先生のご講演からは、子供の造形教育の可能性について多くのことを学ばせていただきました。「旭川の子供たちの心は柔らかい」と授業での子供のよさについてふれていただき、大会運営者一同が大きな勇気をいただいたところです。

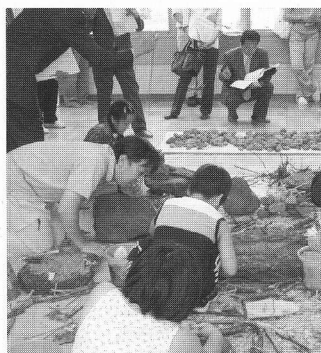
全道各地から参加された皆様との熱い論議の中、

私たちの進むべき方向への貴重なご意見やご示唆を与えていただいたことに深く感謝申しあげる次第です。旭川の研究は、まだ始まったばかりです。今後も旭川らしさを追究し、子供たちの感じる力や素直な表現力をのばしていきたいと考えています。

閉会式を兼ねたレセプションは、立食形式で負担が多いのではと心配しましたが、多数の皆様のご参加をいただき感謝申し上げます。各地からの近況報告からも、今後の造形連盟の大きな力になる熱いエネルギーが感じられました。

最後になりましたが、本大会をご支援してくださいました北海道教育委員会、旭川市教育委員会、旭川小学校長会、旭川中学校長会、旭川市教育研究会、上川管内教育研究会、上川造形教育研究会、北海道私立幼稚園協会旭川支部、北海道高等学校文化連盟、お世話いただきました道造形教育連盟の皆様、ならびに会場校の皆様に深く感謝とお礼を申し上げます。

次回、函館大会が今年以上に盛会となりますようご祈念申しあげ、上川大会終了のご挨拶といたします。





新たな『^{なま}生』との出会い が生まれた旭川大会

第54回全道造形教育研究大会 旭川大会

研究部長 宮 寄 智
(旭川市立永山中学校)

旭川では「生の造形教育」をキーワードに小学校・中学校の領域毎に視点を押さえ、実践と検証を進めてきました。

最初にぶつかったのは、『^{なま}生』とは何だろうかという疑問でした。参観いただいた多くの先生方も『生』の造形教育とは…そんな疑問をもって参加いただいたことと思います。

対象と出会ったときに、子供たちは「何を思い」「何を感じる」のだろうか。図工美術を通して、子供たちの何を育てていくのかなど様々なことが検討され、本研究では『生』を「子供が純粋に感じた思い、ありのままの状態」とおさえました。既成の概念や想像だけに収まった表現にならないように、「出会い」の中で子供たちの『生』な姿を、そして、声を引っ張り出していきたいという、そんな願いをもって研究を進めてきました。

研究を進めるうえで、もっとも重要となったのは、主役である子供たちが「感じる」力を十分に発揮できているか。さらには、研究である以上どの学年にもどの領域にも当てはまる研究内容でなければならないという考えでした。『生』な瞬間は、いかに身体全体で「感じる」ことができることが、子供たちのもつ本来の『生』な姿を導き出すことができるからです。しかし、「感じる」を重視していくと、どうしても題材との「出会い(すなわち導入)」の場面が多くなります。授業を構築する上での最大の難関は、この部分でした。確かに子供たちの発達段階を考えると、『題材との出会い』というのは、特に小学校では重要な意味をもっています。反面、想いをあたため構想を練っていく年齢に達すると、様々な出会いが表現に絡んでくるため、導入だけでは難しくなります。

そこで、「生な出会い」とは、常に「今との出会い」と考え、それは延々と続く「今」であるとおさえました。例えば、中学校表現での木を削った瞬間やインクを載せた瞬間であったり、また、出来上がった作品を見た瞬間であったり、さらに子供たちがそんな発見をした自分に気づいた瞬間

であったり、それら連続している「瞬間」こそが、『生な出会い』そのものなのだと考えました。

その場での子供たちの表情を見ていただけたでしょうか。言葉では言い表せない「何か」をつかんだ表情が見えたその瞬間から次の表現意欲へとつながっていく様子を、各授業の中でご覧いただけたのではないかと思います。

しかし、年齢が高くなればなるほど、子供たちのもつ『生』性を引き出すことには難しさを感じます。「造形遊び」領域からスタートした研究だけに、他の領域では授業構築に向けて領域別部長(各領域提言者)を中心に精力的に実践を進めていただきました。高学年・そして鑑賞という領域で、いかに概念ではない子供本来の素直な表現を導き出すか。その成果の一部を本研究大会の授業でお見せすることができたと思います。

まだまだ旭川の研究は始まったばかりです。今回の研究大会では、一応成果が見られたとはいえ解決すべき課題も山積みです。さらなる実践と検証を進め、旭川そして全道・全国に発信できる『生な造形教育』を作り上げていきたいと考えます。

最後になりましたが、この研究の柱を構築していただいた前研究部長の川原先生をはじめ、本研究大会にご尽力くださった諸先生方に、心より感謝を申し上げます。



熱気こもる旭川大会を終えて

「どきどきわくわくをいつまでも」

【幼稚園分科会運営】 結 柴 左悦子

(旭川大雪幼稚園)

参観にこられた先生たちが「オーっ、やってるな」と立ち止まり見入っていたのは、幼稚園部会のわかば幼稚園 年長組の活動だった。大胆でダイナミック。まさに言葉通り、子供たちは絵の具を使い思い思いに活動していた。しかも、いきいきと目を輝かせて。子供たちの着ていた白いシャツとパンツは見る見るうちに絵の具で染まる。手も足も全身絵の具だらけ。教師も絵の具にまみれている。

第1分科会での研究討議の中心はもっぱらこの年長組の「どきどきわくわくえのぐらんど」のことだった。もちろんもう1クラスの年中組の「わくわくタイム」についてもたくさんの意見・質問があった。しかし、インパクトの強かった絵の具を使った活動に対して、目的や完成のイメージのある共同制作だったのか、美的な面から見てどうかなどの質問が多かった。楽しんでいた様子はあっても園児はどれに興味があって活動しているのか、ばらばらな感じがあったという意見も出た。しかし、わくわく感・どきどき感という感じたままに活動させ、子供が何に興味をもって行動を起こすかが大事なことだ。それが皆ばらばらでもいいじゃないか。大切なのは意欲、興味を持って楽しんだかという過程である。そして、それを導く教師の役割も大変重要だ、と参加した教師たちは改めて思ったようだ。話し合いが進むにつれ、自分の園でもどこまでできるかわからないが取り組んでみたいという感想も参加者から述べられた。

約2時間半の研究協議であったが、スライドを使い活発な意見交換がなされ、有意義な分科会であったように思う。「旭川の造形大会は楽しみだよ」とよく言われるそう。これからもこう言われ続けるよう私たち教師自身も、いつまでも豊かでしなやかな感性をもち続けたいものである。



「シンプルだからこそ・・・」

【小学校表現Ⅰ授業者】 佐 藤 仁 彦

(上富良野町立江幌小学校)

学習指導要領(1・2学年 内容 A表現)では、造形遊びについて記述してあります。私は、これらの内容が明確に表れる題材を目指しました。その中でも「並べる・つなぐ・積む」の積むにこだわった実践に取り組みたいと考え「あれれ 石をつみあげてみると」の題材を旭川大会で授業公開しました。

この学習は、石を積むというとてもシンプルな活動です。しかし、シンプルだからこそ、授業作りを進める中で見えてきたものもたくさんありました。はじめは、素材や場の設定、指導計画などの討議をしていましたが、次第に「素材を並べる・つなぐ・積むにどんな学力があるだろうか?」<そもそも造形遊びはどんな活動をねらっているのだろうか?> <今の子供たちに必要なものとは?>など、題材そのものに加え、造形遊びの根底にかかわる問いがどんどん出てきました。石を積む子供の様子を見て参観された先生たちの中にも、積んでいるだけではないかと感じた方が多かったように思います。

私にとって、授業研究の中で何度も何度も造形遊びについて議論してきたことが、今大会の成果だと思います。しかし、分科会で話し合われた造形遊びにかかわる新たな問題や内容を含め、今後も継続研究が必要だと感じさせられました。授業を見て分科会に参加して下さった多くの先生に感謝いたします。

子供たちとの「生」な出会い

【小学校表現Ⅱ授業者】 大 山 みのり

(旭川市立陵雲小学校)

この3ヶ月間「つくりたいものをつくる部会」の話し合いに参加し、常に「生」の造形教育について自分自身も試行錯誤を繰り返してきた。今回は、その研究の成果を授業という形で発表する幸運に恵まれたわけだが、改めて自分の未熟さを痛感するとともに、造形教育の奥の深さを再認識することとなった。

本時は、スクリーンに大きく映し出された「世界」の中に入り込み、そこでいろいろなものを付け足したり付け替えたりして、効果を確かめるといった活動を取り入れたものだった。子供たちにとって馴染みのない活動ですので、本当に自分の世界に浸れるものか?と授業直前まで不安だった。

しかし、新しいものを吸収し自分のものにするのでできる子供たちの柔軟性は本当に素晴らしく、その活動に浸り、楽しみ、自分の世界を広げていたのである。この日、授業における39名の子供たちの学びの姿そのものが、私にとっての「生な出会い」となった。そして、今回の旭川大会は、私にとって忘れられない夏の思い出の一つとなった。

「旭川大会の情熱を感じて」

【小学校表現Ⅱ分科会運営】 熊 本 有未代

(赤平市立赤平中学校)

前大会の運営と今回の旭川大会に記録係として参加し、全道造形教育研究大会の中に脈々と受け継がれている「思い」を感じることができました。小学校表現Ⅱ分科会では、途切れることなく様々な検討がなされました。提言では、今大会の成功に向けての旭川の熱心な取り組みと、子供の思いを大切にしたい空知の実践の発表があり、図工美術教育を通して私たちがどのように子供たちとかわりあっていくのか、どのようにアプローチしていくのか、日々頭を悩めながら取り組んでいる様子を交流できました。

公開された3つの授業も、対話を大切にしたり、子供が体いっぱい表現したり、「彫刻の街 旭川」のよさを存分に生かすなど、今大会のテーマである『豊かに感じ、思いをふくらませ あらわす喜びを』に、それぞれが多角的に迫る内容であったと思います。

図工美術教育には、まだまだ多くの可能性があるのだと力強い気持ちになって、猛暑の旭川を後にしました。大会の運営に当たられた先生方、お疲れ様でした。来年の函館大会も楽しみです。

指導観の転換を！

【大会中学校表現分科会 運営】 中 島 圭 介

(旭川市立東光中学校)

デザインの幅は広い。私たちはデザインの中で生活しており、生活そのものもデザインだ。

旭川大会の研究主題のねらいは、ひと言で言えば教師の指導観の転換を意図している。従来までの作品主義や画一的な指導が象徴しているように、大人の考えた道筋にあわせて生徒に教え込む授業から、生徒自身の見方・感じ方・考え方を基にした生徒主体の活動に切り替えていく学習のプロセスの研究である。知識中心（概念）の学習から体験中心（身体）の学習に移行し、大人の目では捉えることのできない生徒のリアリティーに基づく発見や世界観に力点を置く指導の試みである。

「水を感じて…」の授業では、①石や粘土などの素材に触れ、空間を感じながら考えていく思考が「生」であり、②同じモノを見て他者との見方の相違を共有し合いながら、「見て・感じて・考え・創造」していくことが「生」であった。

時代は流れる水のように絶えず移り変わっているのに、指導者は時代の流れを読みきれず同じ題材で授業を繰り返していることが多くないだろうか。今後の課題は、目の前の生徒たちがどんな時代の中を生活しているのかを教師自身が見つけ、感じ、そして生徒の立場や見方・感じ方・考え方に歩み寄り、身体性のある造形活動を創り出していく意識変革の必要性を強くもつ必要があるということである。そのためには、教師が題材を十分に知った上での指導法を考えるという原理原則に立ち返り、生徒の行為性に焦点を当て、題材との出会いや探索的な学習プロセスのあり方を探る研究を追及していくことが大切である。造形教育が「生きる力」に役立つ教科であることをアピールするためにも、旭川大会で提案した研究を役立てていただきたいと願っている。

参加してえた造形教育への思い

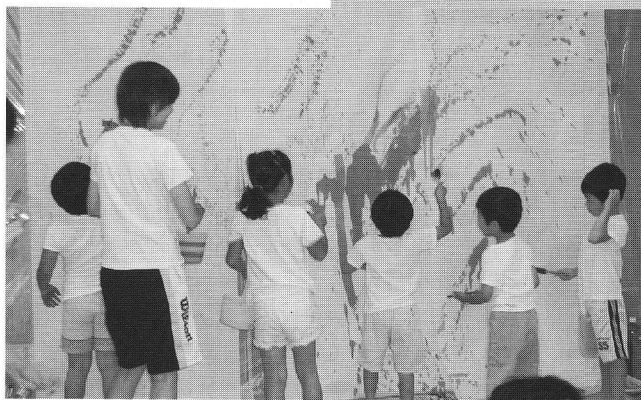
【小学校表現Ⅰ提言者】 山 口 貴 大

(当麻町立当麻小学校)

今回の大会には、一提言者として、また造形教育を学ぶ者として参加させていただきました。大会に向けての授業づくりも研究会のスタッフとともに進めてきました。何度も検討を重ね、悩みながら時間をかけて議論してきました。

そのような中で感じたことの一つは、造形教育への熱い思いが感じられたことです。授業者をはじめスタッフがそれぞれ造形教育の重要性を理解しており、子供のために造形教育がどうあるべきかということ、真摯に考えていました。私は、まだまだ理解も浅く研鑽も足りていないということに気づかされました。社会的にも、学校教育現場においても造形教育は軽視されがちだと思います。時間をかけて論を交わすこともあまりありませんから、このような機会に恵まれたことはとても有意義であったと感じています。

また、造形教育のあり方として「生な造形」という一つの方向性が間違いではないと改めて思い直しました。テレビやゲームが遊びの中心となった生活の中で、対象や材料を五感を通して感じ、感じたものを自分のものとして表現するという造形活動の意義は、とても大きなものだと思います。それは、今大会で、画一的な表現や概念にとらわれず、自分の思いをもち、試行錯誤しながら生き生きと造形活動をしていた子供たちの姿を見ても明らかなことだと思います。このような経験、学習の積み重ねが、自己肯定、自己実現へとつながっていく生きる力の基盤になっていくのだと思います。





旭川大会に参加して

子供と同じ目線で一緒に楽しむ

【大会分科会参加者】 西 口 由 佳

(旭川ふたば幼稚園)

今回、初めて全道大会に参加し、主にわかば幼稚園の公開保育を見せていただきました。年中さんの水時計を制作するコーナーでは、色水の入ったペットボトルにスズランテープを入れる等、アイディアや工夫をして制作をしていて、とても面白そうでした。空き箱や牛乳パックの廃材を使い、子供たちが自由に制作を行うコーナーもあり、自分で選びみんな楽しそうに活動していたのが印象的でした。年長さんの"どきどき・わいわい えのぐらんど"では、洗剤容器に入った絵の具を紙に向けて模様ができるのを楽しんだり、大きな紙や長い紙に向かって身体全体で伸び伸びダイナミックに絵の具を使い、夢中になって活動姿を見て、とても楽しそうだなあと感じました。絵の具の匂いを感じたり、色が混ざる時の色の変化を自分の目で見て触って感じるということを、保育の中で自然と学んでいるのだと思いました。

分科会の中でも、他の先生のお話や意見を聞き、同じ素材を使いいろいろな制作や遊びができることを知りとても参考になりました。子供たちの毎日の生活・環境・身近なところにもたくさんの素材があり、驚きや発見があります。保育を行ううえで保育者自身が思いっきり楽しむこと、子供と同じ目線で一緒に楽しむことが一番大切なことであるということを改めて実感しました。今回の研修で学んだことをこれからの保育に生かしていきたいと思います。

今後の軸となる経験に

【大会分科会参加者】 山 本 泰 寛

(札幌市立澄川西小学校)

大会では、小学校だけではなく幼稚園の授業も見ることができたため、小1担任の私にとっては、子供たちの発達段階を考慮しながら見学させていただきました。初めての新一年生を担当するにあたり戸惑うことの多かった図工科でしたが、授業をされた先生方の声かけ等が参考となり、今後の授業構想や子供たちへの働きかけのイメージを強くできたことが、一番の収穫だと思います。題材への子供たちの想いや意欲を的確に捉え、個に応じた働きかけをする際の先生方の眼差しと、全身で感じて表現することを楽しみながら真剣に取り組む子供たちのキラキラした表現が印象的でした。

初めて参加の私には、少々敷居が高いように思えた研究大会でしたが、経験の浅い私にとって刺激が多く、教科や教材への考え方、子供へのアプローチの仕方や工夫等は「目から鱗」の出来事でした。このような新しい発見や日常的な授業の再確認ができるならば、今後も意欲的に敷居を跨いで行こうと思います。

そして、そこで得たことを活用して目の前の子供とともに自分も磨いていけたらと思っています。この造形教育研究大会に参加させていただいたこと、授業や分科会で学ばせていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。

授業環境への気配りの大切さ

【大会分科会参加者】 新 見 亜矢子

(札幌市立平岸高台小学校)

これからの授業に生かすことができるヒントを、たくさんいただくことができた研究大会でした。私は表現Ⅱ（つくりたいものをつくる）の授業を中心にらせていただきました。子供たちは本当に集中して取り組み、楽しそうに活動し目を輝かせて制作していました。題材の工夫にも目を惹かれましたが、今回の大会では、特に環境に気を配ることについて考えさせられました。想像が広がるような教室・豊富な素材・これまでを振り返ることができるような掲示物…そういった授業を行う環境への細かな配慮が、子供たちの意欲をかきたてていると思いました。

また、授業の中で、他の友達の工夫や「みつけたこと」を交流しあう場が設けられていることも、子供たちにとって良い刺激になっていると感じました。それぞれ制作しているものが異なっているにもかかわらず、同じテーマに向かっているため、友達の作品にも興味を持って向き合うことができるのだと思いました。友達からの言葉を受けて、うれしそうに制作していた子の表情がとても印象に残っています。

本当に、研究の全ては、授業の中の子供の表情・姿として返ってくると感じています。様々なところにアンテナを張り、新鮮な気持ちでものを見ることを大事にしていきたいです。

コラボレーション授業の実践より

【大会中学高校 鑑賞分科会参加者】 寺 腰 精 司

(北海道旭川凌雲高等学校美術科)

猛暑の旭川での13年ぶりの全道大会は、全道規模といえど参加が少ない小分科会となりました。しかし、提言者3名に加え、他の参考事例紹介もあって熱を帯びた話し合いができました。

特に旭川藤女子高校・西田教諭の音楽・書道・美術・工芸4科による学校設定科目のコラボレーション（合流）授業の実践が注目されました。生徒が「テーマ・日本文化の理解」に基づき、工芸で抹茶茶碗を作り、美術で和紙に日本画を描き、書道で短冊に筆を走らせ、和服の着付けをして音楽で琴を練習し、最後に茶室でお茶を味わいながら、書と絵と琴を鑑賞するという実践報告でした。総合的かつ立体的で、まさに五感すべてに働きかけ感性をゆさぶる体験授業である。学校設定科目だからこそ可能とは思いますが、その効果のほどが私たちにも伝わってくる素晴らしいもので、生で感じることに最も近い理想の形態であると強く感じました。他の提言も、立体造形というジャンルでの授業で教師が抱える諸問題の解決のヒントを示唆してくれるなど、とても有意義な質疑が繰り広げられました。

また、現代の高校生が生に感じたことを率直に述べるができるのかなどの疑問も出て、生の感じ方を取り上げる方法について、研究の余地があると感じました。今大会をきっかけに旭川や上川管内の高校教員による教科研究会が継続的に実施されることを望みます。

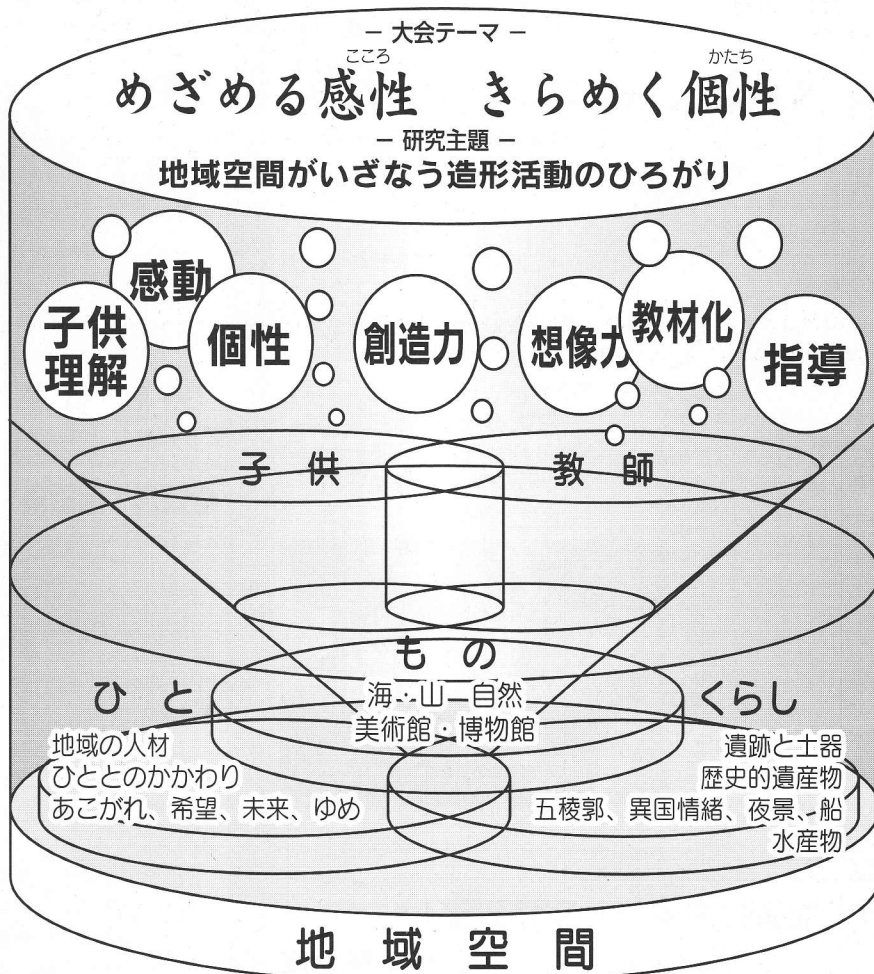
予 告

第55回 全道造形教育研究大会 函館大会

大会テーマ：
めざめる感性 きらめく個性
— 研究主題 —
～地域空間がいざなう造形活動のひろがり～

日 時：
平成17年7月28日(木)

場 所：
北海道教育大学
附属函館中学校
〒041-0806 函館市美原3丁目48-6



第55回 全道造形教育研究大会 会函館大会に向けて

函館美術教育研究会 瀧 本 伸 幸
(函館市立旭岡小学校)

第55回全道造形教育研究大会函館大会の研究テーマは、「めざめる感性 (感性) きらめく個性 (個性)」。そして、研究主題は「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」に決まり、現在準備が着々と進められています。

今回は、函館そして渡島・檜山という地域空間そのものを包括的な題材・素材・テーマととらえて授業を構築していきたいと考えています。具体的には、希望や憧れ・夢・地域の人々とかかわりなどを「ひとからのいざない」、自然・現象・生き物・水産物などにかかわるものを「ものからのいざない」、歴史や建築物・夜景・異国情緒などにかかわるものを「暮らしからのいざない」として、それぞれを教材化して子供の感性をゆさぶり、めざめさせながら、個性がきらめく造形活動を展開していきます。また、G・Tや美術館、大学などの外部機関と連携や、T・Tを活用して個に応じた学習指導を充実させるなど、授業展開の枠を広げていきます。

さらに、指導と評価の一体化、総合的な学習の時間との関連化を意識するなど、教育の今日的な課題への対応も視野に入れながら、今後の新しい造形教育のあり方を実践を通して発信していきたいと考えております。たくさんの皆様の参加をお待ちしております。

地区研究サークル 近況だより



室蘭市教育研究会造形部会の紹介

大野 達也

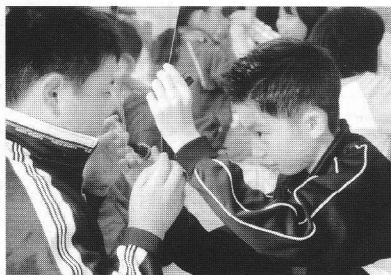
(室蘭市立陣屋小学校)

今年度の室蘭市教育研究会造形部会は、会員数23名でスタートしました。年々少しずつ会員数が減少しているために、部会構成が従来までの3ブロック制から今年度は2ブロック制で活動することになりました。授業研究グループと実技研究・作品展示グループです。

造形教育は、特に中学校において時数の削減や教員数の減少のために、ある面、がけっぱちに立たされているといっても過言ではありません。また、最近よく耳にする造形教育の教育的価値観についても非常に気にかかります。

今年度も例年通りに部会行事を計画しています。まずはデッサン会です。そして、先日行われた公開授業研究会です。小学校5年生が友達顔の絵を描く授業でした。子供たちの実態に合わせて指導法が研究された素晴らしい授業でした。

あわせて午後からは実技講座を行いました。他にも、これからフィールドワーク等を行う予定です。会員数は減っていますが、その分一人ひとり実践を積み上げていっています。



「参加者に恵まれた実技研修」

胆振造形教育研究会 佐藤 輝彦

(登別市立登別小学校)

胆振造形教育研究会では、今年度 藤沢紀世安(苫小牧市立豊川小学校校長)新会長の体制の下、会員33名でスタートしました。

実技研修・授業研修・宿泊研修等の計画で活動を進めてきておりますが、7月30日の今年度最初の実技研修では、札幌市から伊藤善彬先生を講師としてお招きし、やわらかい雰囲気の中で紙工作のコツを懇切丁寧な指導で伝授していただきました。一般の先生も含め17名の参加でしたが、役員を除けば20代から30代という比較的若い先生方が大半でした。どの先生方も熱心に意欲的に取り組み、感心・感動・感激の一日でした。

本研究会も例年、若い先生方の研究会への参加が少ない状態が続いておりますが、今回のこの実技研修の参加状況を見ますと、将来の造形教育を担う若い先生方に期待する気持ちが大きく膨らむとともに、とても明るい気分になりました。

今後、若い先生方が寄り参加しやすい、やさしい胆振造形教育研究会にすべく努力していきたいと考えております。

あとがき

旭川大会は、全道各地から大勢の参加者が集い、まさに熱のこもった研究となった大会でした。その活気に満ちた大会風景を特集した第119号をお届けいたしました。お忙しい中、原稿をお寄せくださいました先生方に厚くお礼申し上げます。また、多くのご意見をいただきながら、各地の造形教育活動の交流もできるよう努めてまいりますので、これからもご協力くださいますようお願いいたします。

造形連盟広報部 (中山龍男、三井 哲、山室ゆかり、富波 修、東 尚典、平井 歩、松本和彦、伊藤聡美、加藤正幸)



版画展・版画集・版画カレンダー事業に向けて

留萌地方美術教育研究会 斉藤 友昭

(留萌市立東光小学校)

今年度は、隔年で行っている留萌管内児童生徒版画展の開催年です。12月末にかけて作品を募集し、2月から3月にかけて留萌市、増毛町、羽幌町、天塩町の管内4ヶ所で版画展を開催します。

また、それにあわせて管内児童生徒版画集「版」第12集も発刊します。版画展に寄せられた全作品と版画指導の資料として、また、制作の記録として26年にもなる事業となります。

ただここ数年、頭が痛いことは予算の関係です。財政的に厳しい環境の中で、最近は販売代金と広告代等で賄っています。したがって、それが振るわないと赤字になってしまいます。少人数の本会にこれを埋める余裕はありません。何とか会員の努力でしのいでいますが、このままではこの事業の大きな決断を迫られる時期が来るかもしれません。そうならないようにと今年も事業を進めていくつもりです。紙面をお借りして申し訳ありませんが、全道の造形連盟の会員の方へも版画集やカレンダーの事業へご協力をお願いいたします。(希望がありましたら、ご連絡ください)

オホーツク造形教育連盟の活動

オホーツク造形教育連盟 委員長 光岡 光彦

(雄武町立沢木小学校)

本連盟は、管内の造形教育の研究団体としては唯一であり、「一人一人が造形的な喜びを実感するために」を研究テーマとして造形教育を推進しています。中心的な活動は、地域の公共施設を活用した実技研修会の実施(留辺蘂町根湯果夢林の館で動く木のおもちゃ作り)を通し、作品作りに取り込むことによって得られる楽しさや知識・技能の向上を図っています。また、管内研究大会を開催し、授業公開・実技研修会・終了後の近況交流会を通し、会員はもとより参加者の日常の指導上の悩み解決に努めています。他に教育美術展の審査員派遣を行っているところです。

ここ数年、「豊かな感性を育む・表現力を高める」等を研修テーマにしている学校がみられます。指導者自身の専門性が問われ、表現方法について悩みを持っている教員が多いのが現状です。「～方式」の講座には、かなりの人数が受講している現実が物語っています。

そのような中で、専門性を高める一助となればと願い、校内実技研修の要請には連盟からの派遣を行っています。